豊かな図版で見る二十世紀文学史

小谷一郎

本書は、楊義、張中良、中井政喜の共著『中国新文学図志』（上下）（中国・人民文学出版社）の全訳である。

原著は、はじめ『二十世紀中国文学図志』（上下）として一九九五年一月台湾・業強出版社から出版され、その後九六年八月に北京・人民文学出版社から『中国新文学図志』（上下）として出版、九七年一二月に第三版が出された。このうち、本書が訳出に際し底本としたのは、「序」と「第一部」から「第三部」までが台湾で出された『二十世紀中国文学図志』、「第四部」と「跋」、「跋余」が人民文学出版社版第三版『中国新文学図志』である。

ここに見える「二十世紀中国文学」という考え方は、よく知られているように、銭理群、陳平原、黄子平が、文革後の一九八五年、「重写文学史」が問題視される中で、従来の「近代」、「現代」、「当代」という古典文学から近現代文学に流れる歴史を寸断したきわめて「政治的」な時代区分に対して、それを通底し、中国文学を世界文学の中に位置付けようとした画期的な提起である（参照：銭理群・陳平原・黄子平『二十世紀中国文学三人談』人民文学出版社　八八年九月）。ちなみに、彼らがそこで取った時代区分とは、陳平原『二十世紀中国小説史・第一巻』（北京大学出版社　八九年一二月）所収の厳家炎「前言」によれば、「一八九七から一九一六までが第一巻」、「一九一七から二七までが第二巻」、「一九二八から三七までが第三巻」、「一九三七から四九までが第四巻」、「一九四九から七六までが第五巻」、「七七から八四が第六巻」、「八五から現在までが第七巻」となっている。この時代区分は、大筋において日本側研究者がそれまで取ってきた時代区分と基本的に同じなのだが、たとえば陳平原が自身の『中国小説叙事模式的転変』（北京大学出版社　二〇〇三年七月）の研究成果をふまえ、「プレ近代文学」の始まりを従来のそれよりも一年早めたことなどをはじめ、中国側の仕事には教えられることが多かった。そして何よりも頭が下がるのは、政治的な壁の中で、それと向かい合い、それを切り開こうとした中国側研究者の苦労である。「着点」が同じでも、それを公に出来るまでのプロセス、辛苦、その重さがまったく違う。さらに言うと、先の『二十世紀中国小説史』は八九年一二月発行の第一巻を除いて出版されてい

楊義・張中良・中井政喜著／森川（麦生）登美江・星野幸代・中井政喜訳
二十世紀中国文学図志
A4判　八〇八頁
学術出版会［一二、六〇〇円］

ない。直前には、「六四」事件がある。果たしてそこに何があったのか、中国のある友人は各巻が個別の担当で表記に統一が取れなかったからだと言うのだが、実際的なことは何も分らない。

原著は、九二年秋、鄭振鐸『挿図本中国文学史』などを念頭に、かねがね「図をもって史を表し、史をもって図を統べる」（本書「序章」）「図志」的文学史を出したいと考えていた楊義が、折しも海外研修で社会科学院文学研究所に来ていた中井政喜と、同じ社会科学院の日本留学の経験を持つ張中良の協力を得てまとめたものである。

原著は「四部」構成で、「第一部（原著では「巻」）が一九〇〇から一六年（清末民初の章）、「第二部」が一九一七から二六年（五四の章）、「第三部」が一九二七から三六年（三〇年代の章）、「第四部」が一九三七から四九年（四〇年代の章）からなっており、原筆者たちが「二十世紀中国文学」という志向に共鳴していることは確かである。だが、原著がはじめ『二十世紀中国文学図志』と題して出版されながら、ついで出版された時に書名を『中国新文学図志』と改めた事情などについてはよく分からない。しかしながら、本書においてその書名を再び『二十世紀中国文学図志』と題した背景には、訳者たちのある思いがあるものと推察される。

原著『中国新文学図志』（九六年初版）は、一〇五編の項目別の文章からなり、中井政喜が一六編、張中良が二一編、残り六八編をすべてを楊義が担当している。私にとって原著の公刊は衝撃的だった。それは私だけではないと思う。上下二冊にわたる一〇五項目からなる「図志」付きの中国近現代文学史の出版は、画期的なものだった。その最大の魅力は「図版」を有する文学史ということにあり、原著の出版は、着眼のそれは別としてそれこそ「原本」を有する中国だからこそ可能だったと言っても過言ではないだろう。

「図版」とは「もの」であり、それは「論」とはまた違った、別の力を持っている。「図版」は「もの」であるだけに、それ自体が一つの動かし難い資料であると同時に、その具体的な「図版」を前にした議論は、そこで展開される「論」をも規定していくことになる。もちろん一方では、論者が自身の「論」のために「図版」を求め、採用するということもあり得るのだが、そうしたことはおよそ論外で、「図志」的文学史とは、基本的にこうした「もの」としての「図版」と「論」との相関関係、緊張の上に成り立つものであり、そこでは、引かれる「図版」が的確で、豊かであればあるほど、「論」もまた豊かで確かなものとなっていくという関係にある。こうした中で原著に収録された「図版」は四七五枚にも及ぶ。

本書はかかる『中国新文学図志』の全訳である。

本書の訳者は、原著者の一人中井政喜と森川（麦生）登美江、星野幸代の三名で、森川が「第一章」（原著「第一部」）を、星野が「第三章」（原著「第三部」）を担当し、それ以外の原著者楊義の「跋」、「跋余」、第二章、第四章はすべて中井の手になる。その上で第四章には、「第三版」で原著者楊義が「第四部」の内容的に弱いと考

え、「銭鍾書『囲城』の知性と諧謔味」「延安の文学に対する『中国文化』の企画」、「『解放日報』副刊の戦闘性と民間の味わい」、「『野草』の雑文の時代的性格」の四編が補われたため、本書は原著より多い一〇九編からなっている。

本書の発行年月日は二〇〇九年一月、最も近い原著『中国新文学図志』「第三版」の出版が九七年であることから見ても一〇年以上の年月が流れており、この間の訳者たちのご苦労を思うと、いまはただ本書の公刊を素直に喜びたい。

本書は単なる原著『中国新文学図志』の全訳ではない。そこには、全一〇九編に及ぶ訳業の外に「著者別索引」、そして各編の訳の後に訳者の「訳注」が付された訳者渾身の訳業である。なかでも、要となる「図版」は、四七五枚という総数は変わらないものの、訳者が「この翻訳本ではできるだけ原板のままの挿絵、表紙絵を採用した」（「序章」「注」）とさりげなく述べているように、可能な限り「原本」に立向かい、あらためて写真撮影をし、カラー写真を含めて、各編の後に「訳注」、「図版注」を付しているところに本書の大きな特徴がある。

本来ならここで本書の訳業と原著とを付き合わせ、訳文のそれぞれに言及すべきなのかも知れないが、一〇九編、八〇〇頁以上にもわたる本書を前に、限られた時間内での各編への具体的な評はそれこそ私の任に余る。それは今後、本書を読まれた方々から寄せられるべきものだと思う。

その上で一つだけ言わせていただければ、「人名索引」に加えて「収録図版一覧」のようなものが欲しかった。各編末にある「図版注」はそれとして、これだけだと、せっかく訳者があらためて「原本」に当たり、カラー版を含めてデジタル化された苦労、本書所収の「図版」の全体像が見えてこない。「図版」は本書の要でもあるだけに「図版一覧」的なものが欲しかった。各編の「図版注」が確かなものであるだけになおのことそう思う。

原著『中国新文学図志』が出版された時、私はそれを大学の授業のテキストとし、受講生を二、三人のグループに分け、興味ある項目をそれぞれに選んでもらい報告してもらった。その時の学生たちの反応はじつに良く、「図版」や「論」をめぐって自在に議論が交わされた。そしていま本書がある。新たな「図版」に加え、「訳注」、「図版注」もある本書を前に、これを現場でどう生かしていけばいいのか、いまはそれが悩ましい。

（こたに・いちろう　埼玉大学）

♣

■野草85

【論文】抑圧された「音の小説」――蕭乾『夢之谷』を読む（西村正男）／中国現代都市演劇における特刊の役割――民国初年の特刊を中心に（松浦恆雄）／文壇デビュー期の施蟄存――「新旧我無成見」を中心に（徐暁紅）／王安憶『香港的情与愛』における老魏のトポフィリア（杉江叔子）【書評】厳安生著『陶昌孫　その数奇な生涯　もう一つの中国人留学精神史』（大東和重）ほか

「中国文芸研究会発行　A5判　九六頁　二〇一〇年二月刊　二、六二五円　＊東方書店にて取扱中」